

金光大神の言葉はどう受けとめられたのか

—言葉が「理解」とされる意味—

大林 浩治

今日のお話で気にかけておきたいこと

今日のお話は、いろいろスライドを見ていただきながら、進めたいと考えています。この教学講演会では、アンケートが配られていると思うのですが、そこでのご意見に次のようなものが窺えます。

一つは「お話の内容がよくわかりにくい」。これは、どこか特別な、日頃考えても見ない特殊な事柄についての話になっていて、しかも制度的だったり、専門的な言葉がでてきたりして、問題が身近に考えにくいという指摘だとも思います。

もう一つは、その反対で、「興味深い話なので、もっと聞かせてほしい」というご意見です。これは好意的な意見ですから、話をする者にとっては、大変ありがたいのですが、しかし、そう手放しで喜んでいいのだろうかと考えさせられるのです。というのも、「もっと聞かせてほしい」には、お話を聞かれた方にとって、「あれでは物足りない」という意味があったのではないかと思われるからです。

いずれにしても、これらの意見は、教学や教学研究といったことからへの「思い」として、よく考えてみるべきであろうと思っています。

私は、今日この場で自分が取り組んできた教学研究のお話をしようと立っています。ですが、そんな自分でさえ、聞く側にたって、たとえば「日頃、教学や研究になじみのない自分だったら」と思ってしまうと、聞きかたがわからなくて面食らうでしょう。ですから、これから話すことがすれ違いにならなければいいなあと願うのです。

これからお話しする内容も、どうやらそういう問題を抱えていると思います。だからこそ、「教学研究とは何か」という理解が少しでも進むようになればいいなと願って話をさせていただきます。

教学とは何か

さて、「その教学とは何か」ということなのですが、先月、学院でお話しさせていただく機会がありました。学院生のみなさんも、「教学って何だろう？」と聞かれています。そこでは、こんなスライドを見ていただきました。

簡単な形で示すとこういうものだと思うのです。教学は、何か信心に関わる



問題を言葉にして問うこと、またその働きであると。そしてそこに本教の道ならではの問い方や求め方があるだろう。問題の問い方や導き方、そこに道づけが必要になるとき、研究という営みが生じていきます。単に個人の自己主張ではだめで、かといっていたずらに一般化したり、抽象的に走りすぎてもよくありません。本教ならではの独特の

ありように結びつく手だてでもあり、広く世に問えるようなかたちをとる上で必要になるのが研究です。そして信心の手応えが生まれていく、それが教学であり、教学研究じゃないか。そう思ってこの絵を示しました。

そして、そう見ることができるならば、教学研究は研究所という山の上の人間にだけにとどまらない大きな意味をもつと言えるでしょう。しかし一方で、研究所で御用する人は、「山の上の引きこもり」「役立たずの頭でっかち」「信心知らず」と見られてもおかしくない存在なんだと心得ておくべきで、「だからどうあればよいか」と全教との関わりで考え、教学を道づけていくことが必要だと思うのです。

ご信者さんからの声

教学研究はより広く求められていいんだと、改めて考えさせてくれた発言があります。それは、2008年のちょうど12月、信越教区で「教学に関する交流集会」を開いたことがあり、そこであるご信者さんの次の言がきっかけとなったのです。

私は信者も教学が根っこにあるのとないのでは、全然ちがうんじゃないかと思うんですよね。教学というようなものは、オープンになってるんでしょうけど、たぶん知らない人が多いのかもしれないと思います。

お道の本当のものを伝えていくという努力は、(教師は)して下さっているんですけど、あんまりこっち(信者)に伝わってないことが多いんじゃないかな、と思いますね。

だからそういう意味で、先生だけでなく、教学的なことを信者さんもどんどん知る機会を与えてもらって… そうでないとなが心から練り出すっていうことにはつながっていかないと、思います。

その方は、紀要『金光教学』をよく買い求められているらしいのですが、「難しくさっぱり」と言われます。でも続けて「難しいんだけどもおもしろい」とも言

われるのです。なぜなら「知らないことがいっぱい書いてあったから」。何も紀要『金光教学』の良さを言われているのではないんですね。

「金光教の信心について知る教学が信者にあるだけで、信心の取り組みはずいぶん違ってくる」ということなのです。知識として知っておくことも大事ですが、それに加えてその知識は「わが心から練り出す信心」として「信心を吟味する」教学の姿勢にも関わっているんだ、という意味で言われています。

「助かり」とは？

信心の「言い当て」にとどまらずに

- 「ふうーん。それで...？」
- 心の底からの納得とは？
- 存在了解⇒ほかならぬ“わたし”を生きねばならない人間にとって、単に存在しているという説明では足りず、存在しながら何か大いなる働きとの関わりで、存在していること（「在る」というそのこと）への了解が必要となる。
- 神さまとの関わりが大事に。

それを聞いて、感銘を受けたのですが、と同時に、私自身に問いが突きつけられました。自分の取り組みが、「信心」についてのあれこれの説明にとどまっているのじゃないかということなんですね。

何しろ自分の命を支えている、またそう信じている「信心」を問題にするのが教学なのですから。教

学によって「心の底からの納得」がもたらされるようなことでなければならぬなあと思うのです。でもそれがなかなか難しい。

たとえば「信心」において「助かり」といいます。言葉ではわかります。でもそれはどういうことを指しているのかとなると、とたんにあやしくなってしまいます。

かつて福嶋義次先生は、「理解」を取り上げて、この問題に取り組まれました。福嶋先生は、「理解」を考察するに当たって、「理解」によって人が助かる事実に注目されます。その「助かり」を、人間にとって「いま、ここに在る」という気づき、存在への深い了解がもたらされること、すなわち「存在了解」として考察されました。この「存在了解」は、ハイデガーに由来する「存在」への問いかけの言葉です。その言葉の助けを借りて、イメージとしてつかむほかなかった「助かり」に対する考え方に手だてが講じられることになったのです。

この「存在了解」という意味を「理解」に投げかけると何が見えてくるか。すると、神という何か大いなる働きとの関わりで、存在（「在る」ということ）の了解がもたらされたのだということがはっきり見えてくるのです。

病気、災難など、その回復や除去を強く願うにしても、病気、災難に見舞われる人間にとってほんとうの意味で「助かり」となるのは、その人間がどうあるかをしっかりとしたもののできるかどうかにかかってきます。福嶋先生は、その「どうあるか」が大きな働きによって気づかれていく作用を「理解」に見て行かれ、次のような論文を発表されています。

- | | |
|----------------------------------|--------------------------|
| ①「慣習世界と信仰形式」第15号1975 | *いずれも副題に「理解研究ノート」と記されている |
| ②「『理解』のことばについて」第16号1976 | |
| ③「金神、その神性開示について」第17号1977 | |
| ④「時節考」第19号1979 | |
| ⑤「『人代』—その神の忘却と隠蔽についての素描」第21号1981 | |
| ⑥「神としての『天地』」第25号1985 | |

ところで、福嶋先生の「理解研究」に触れながら、さらに私は、「理解になる」という問題を掘り下げてみたいと思うようになりました。福嶋先生の研究では、金光大神の言葉はすでに「理解」と見なされています。そこから「理解」の言葉がどう顕現したかという問い方になっています。でも、そこにまだ検討余地が残っているのでは？ そう思うようになったのです。

というのも、「理解」というのは、言葉を「なるほど理解だ」といって受けとめる人にこそ呼ばれるべきものではないか。それが、「理解」にとって現実的な考え方なのではないかと考えたからです。人がそれによって助かって、信心の意味を確かめるのであり、人間の生きている根本のところから問題にするならば、最初から「助かり」の言葉としての「理解」だと見てしまうと、それはおかしいのじゃないかと思いはじめます。金光大神が教祖であるという実際的な意味は、参拝する信者の求めに響いてこそ成立するのであり、それを元にして金光大神は神との関係をうち立てていったという筋道が実際のところだと思うのです。

ほんとうに「助かり」を求めているような人を見ていきますと、そこでは自分が「生きている」「存在する」という事実一つが大変な問題となっているはずです。生きていること自体があやふやになってしまって、切実に問われている人間へ「助かり」がどうもたらされたかという、それが金光大神に信心や助かりを求め、神さまにふれていくことにおいて最重要の問題です。

しかし、これは私に真っ先に問われる問題でもあります。私は「理解」を、教祖が話し、それによって人が助かった言葉だと思いこんでいる節があります。「じゃあ、お前さんは、この言葉でどう助かったのかい？」神さまからそう聞かれると、「すみません」というしかありません。わかった風に「理解」の言葉を使い、信心の説明の道具にしてしまっています。

「存在する」という、その事実が問われている人間が信心を求めているのだ、と言いました。人がなぜ信心にあずかろうとするのか、なぜ神さまとふれあうことを切に望むのか、信心の理由に、この問題が直結します。人間は生きていく中でこの問題を問われ続けるのだとあってよいかもしれません。

このことは、極端な例で言えば、「死」に直面したときを想像すればよくわかります。余命何ヶ月と医者から宣告をされたとします。あるいは精神的動揺にあり自殺したいとまで思う場合を想定としましょう。これら問題への直面は、何をおいても、「わたし」という自分自身が存在している意味への求めが必要になるのだと思います。生命の危うさを抱える場面、あるいは困窮の果てに生きる意味の喪失感を抱くときなど、存在の意味への問いが突出したものになることは、容易に理解されるでしょう。

「死」に直面した場面は、あまりにも極端な例とも言えます。が、しかしそれほど危機に限らなくても、こうした問題は指摘できそうです。存在の意味への問いは、日常として慣れ親しんでいる光景が喪失していく場面に出くわすときに浮かんでいるからです。社会関係を生きる人間に当たり前のように訪れると言えるでしょう。進学や就職、結婚、転勤…などがそうです。どうやら人は、自身や世界が在るという自明性の根拠を求めざるを得ない命を抱えて生きているのでしょう。このように、これまでとは異なる自己の立ち現れを要請されながら生きなければならず、そのとき自己自身の自明性は不安定にならざるをえないのです。

このように生じる存在の意味への問いによって、神さまからの眼差しに触れる信心の営みがかたちづくられていくのではないのでしょうか。「理解」はこうした関心から、今一度見てみる要があると思えるのです。

言葉が「理解」になる！

ここに示したのは、浅野虎吉の妻登美の伝えです。（「原ノート」とは高橋正雄が調査したときのノートをさして呼んでいます）

ここには、言葉が「理解」になる、その瞬間を考える上で示唆的な様子が浮かんでいます。

「脳髄にしみこみたり」と、登美

言葉が理解になる！

- ・「日々に信心をしたら、湯をわかしたら湯でつかうがよい。水にせんようにするがよい。」私の親切を先方が受けてくれず、其為に私もつい愚痴をこぼし居り、金光様には一口も申し上げず、宅にて度々御願い申し居りに、其事につきてかく仰せられ**脳髄にしみこみたり**。

（浅野登美の伝え、「原ノート」）

- ・言葉に魂が入って受けとめられる。

は伝えています。そこでの納得のされようは、知的で論理的に教えを理解したというよりも、何かそこでひとつ「開かれた」出来事として経験されています。認識が開かれる、自己が変容する、それを呼び起こす言葉の体験ですが、その際、脳髄にしみるほどに否応なく自分の問題性に気づくことにもなっています。しかも一瞬にして。それが自己に響く言葉の体験なのでしょう。



どういふことでしょうか？ 少しスライドで見たいと思います。

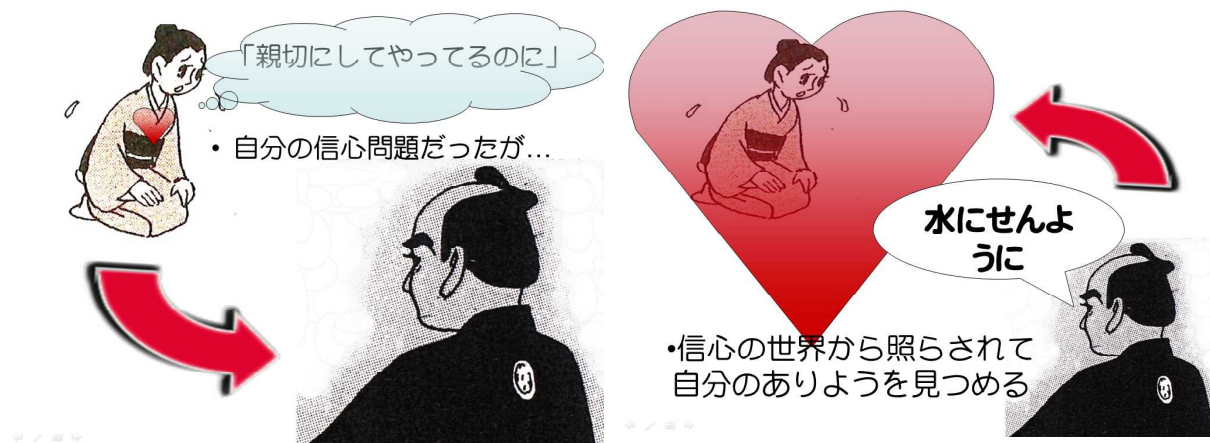
まず、このような言葉の場面が考えられます。

自分から一言も言わなかったのに、言い当てられるように言葉を聞いてしまいます。登美にすればそれは苦にやんでいた問題だったのでしょう。そこに言葉が届けられるのです。

そのことが、なぜ「開かれ」につながるのでしょうか？

苦にやんでいた問題は、自分の信心の問題です。自分の信心の問題ですから、不本意きわまりない。「せつかく、親切にしてやっているのに」。信心をしている自分が、他人への親切をしているんだから、「おかしくはない」と思っています。家では、自分の心持ちの中で解決できる問題として願っています。

そこへ教祖から言葉が下がります。そして、びっくりするわけですが。自分の信心で問うていた問題が、そういうことではなく、信心の世界から見返されたからです。



自分の問題意識でしか信心をとらえていなかった登美が、信心の世界から見返された、ということになります。しかもそれを神さまは、ご存じだったということ

です。なので、神さまに触れ、包まれる体験となっています。脳髄にしみこまざるを得ないのでしょう。

このように「理解」の出来事は、「助かりが何か」といった問題を、自己の信心によって認めるのではなく、信心に到来していく自己のあり方で認めていくことだといえるのです。またそのことを了解せしめられると、おのずと自己が変わっていかざるを得ません。そして「変わっていく自己」を理解する体験になるといえるのです。

このような言葉の受け止めが「理解」なんだ、ということは大事な問題じゃないでしょうか。「理解」の場面は、もたらされる言葉によって、自己が溶けだし、何か言葉の魂といったものに自己が浸されていくような出来事です。一瞬、驚きます。自己からすれば、それは自己という意識の消滅でしょう。そのとたん、自分から心は溶けだし、何か新しい世界を気づかせられるのです。それは、本人にとっては一瞬の体験であったりします。意識も追いつかない。

気づかされる出来事というのは、往々にして、自分が承伏しがたいから生じます。自分ではできないから生じるんですね。そんな自分へ世界の方から照らされる。教祖が神と会うときの体験と同じ問題を見ることもできるかと思います。

ところで、承伏しがたさは現実を生きている以上、誰しもセットされている問題です。次にこの承服しがたさは、マンガでどういう表現になっているかを見てみたいと思います。

マンガに見る「心」の動き

これは金光図書館にある『YOU』という雑誌の「ハガネの女」という話（『YOU』深谷かおる作、集英社、2011、No.10）です。岡田清華さんに紹介してもらって知ることになりました。

主人公は、芳賀稲子、通称“ハガネ”と呼ばれます。今は「東向大附属中学の産休補助教員」です。そこで、エリート教育を打ち出す教頭から、競争主義の方針をうながされ、ハガネは考え込むのです。その時の漫画のコマ割りに注目したいと思います。

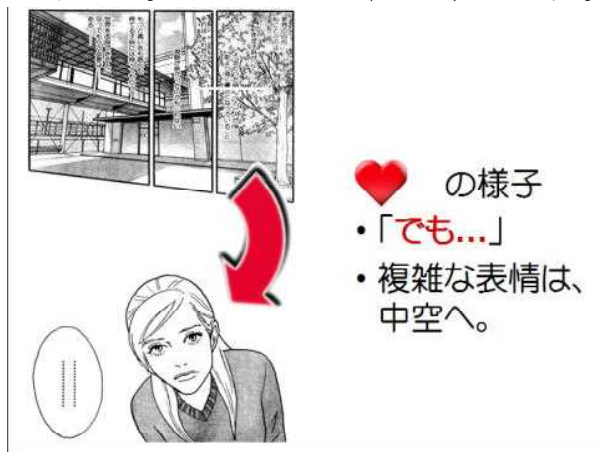


主人公の内面と風景があります。まず空を背景に教頭の言葉。それを聞いて驚き、考え込むハガネ。心の模様は、コマ割りで示されます。けれど、それはストーリー展開に直接影響しません。「そうそれも正しいかもしれない。でも…」という「でも…」の内容が描かれます。心はうつろ。その心は空中へ漂います。

・心のうつろい(「でも…」)をあらわす全体画面と「心の関係」



「そうかもしれない。でも…」



空を見上げるハガネ。何か自分を越えた視座につながろうとしているのです。

・私が生きる場所や意味を知る深まりのプロセス
・広がる「聞いた体験の意味」



空に溶け出す



こうしたコマ割りによって、「聞いた体験」の広がりを読者に告げられます。画面では、空を見上げるハガネですが、読者はハガネの心の声を聞くことができます。そして空を見上げるハガネに対し、読者は空からハガネを見下ろすことになっています。「さあ、どうするハガネ」。そう呼びかけたくになります。主

人公のストーリーに読者は直接関わることはできません。でも空からハガネを見守りながら読み進めるのです。神さまが氏子に対して、慈愛の目を向けるとすれば、こうしたものとしてたどることができるかもしれません。

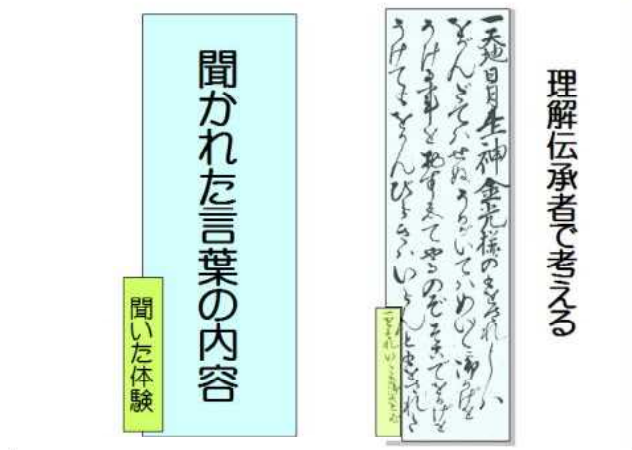
理解伝承者で考える

このような問題を意識しながら、言葉を「理解」として聞く経験を見ていきたいと思います。

空を見上げるハガネ

- ・空から見下ろす構図。読者⇒「さあ、どうする？ハガネ!？」
- ・ハガネの心の声を聞く読者は、作者の意図（ストーリー展開）と離れ、主人公に共振。
- ・上空(神の視座)から地上のハガネと目を交わす。





ここに金光大神の「理解」を綴った市村光五郎の帳面があります。それを見ると随所に「をそれいたる御ことば」(恐れ入ったるお言葉)、「せとく有」(説得あり)、「御いずりくだされ」(お譲り下され)、「御かたりくだされ」(お語り下され)といった字句があるのです。

これら字句からは、言葉に触れたときの心模様があらわれていると言

えそうです。「恐れ入り」といった字句は、語り出された言葉が自己に収められたというよりも、逆に、その言葉によって自己が引きずり出されたことを示しているのではないのでしょうか。この脱自的な事態は、言葉への関心を生み、参拝の都度、言葉を綴らせる動機になったといえるでしょう。

「理解」の言葉は、伝承者たちが金光大神から聞いたり、書き留めたりしたのですが、そこに働いていたのは、「教えとは何たるか」を生身で確認しようという意味だったことに気づくのです。その意味で「恐れ入り」といった書き込みは、心に響く声として「どう言われたか」を聞き受ける言葉の感触があらわれているのです。

自分には回収できない言葉の体験

- 脱自化。
- 「恐れ入り」⇒教えの無限の広がり、その世界への参入。
- 導かれたことを告げる言葉。



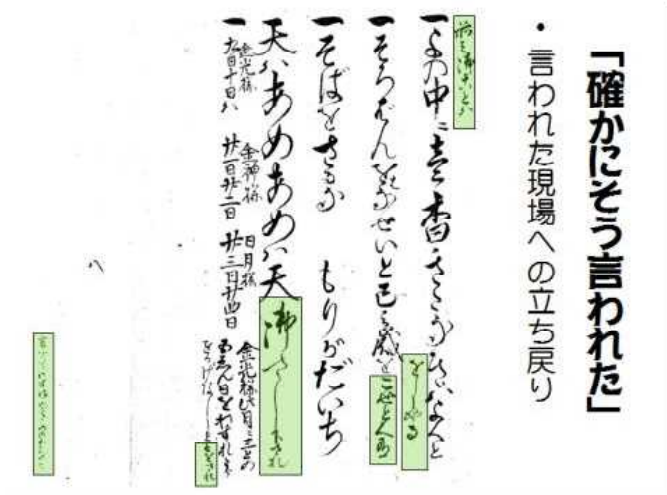
理解の世界

「確かにそう言われた」という体験

こう見ていくと、「理解」において、言葉は単に聞くというよりも、「はじめて聞く」と思わずにいられないほどの強烈な体験事になっていると言えそうです。

そのとき、信心に目覚めるとか、神さまに出会うというような、神との交感の感じ取り方へ誘うべく、交感の所在を求めさせる者として、その人間は立ち現れているのではないのでしょうか。

このほかにも市村さんは、「恐れ多い」と受けとめ感じたところへ、何度も立ち返ろうと願っています。そして神さまとのふれあい、交感を再びたぐり寄せようと我が身に言葉を刻んでおこうと考えたに違いありません。



このように、市村さんに見ることが出来るのは、神との交感である信心をたぐり寄せようとして、言葉に「理解」という意味づけを与えている姿です。まさに「聞かれた」意味を言葉に残すことで、神の世界に触れることを目指す。それを言葉に願い、「理解」と呼んでいたのです。

そしてそのような言葉を発した人

間が現実には彼の前にいたのです。金光大神が教祖である理由、まさに生神だということをこうした形で実感させられていると言えるでしょう。

「おそれいる」こと

気分失調を抱えていた津川治雄は、金光大神が伝えた言葉を次のように残しています。

ここで重要なのは、恐縮し、困惑する、交感の事態です。津川にしてみれば、自分をコントロールするだけでも精一杯なはずで、そのような津川に、金光

「津川さん、あなたもよく堪忍なさる。神様が感心してられる。それでなければならぬが、もう一つ進むがよい」

「はい、どのようにでございますか」

「あなたは、腹が立ってもこらえてこらえて、それを腹の中へおさえこんでられる。それではわが体をこわす。もう一つ進んで、腹の立つことを知らないということになるがよい。それには、悪いことがきても、『これは自分が犯した罪のめぐりか、先祖が犯した罪のめぐりであろう。これで、一つめぐりを取り払ってもらうのだ』と思うがよい。また、それに相違ないのであるから」

と言われた。恐れ入った。そして、困った。なかなか信心はできるものではないと思った。

理解 II 津川治雄20

大神はコントロールすることさえも問題にします。気分失調は、自分の力ではなんともならない重荷のように感じざるを得ません。ですから、津川が見せていた「堪忍」の態度は、他者に対する自己防衛です。ところが金光大神は、この態度が自分へのとらわれだと指摘し、そこから脱出するよう促すのです。津川にすれば、たまったものではありません。それこそ身の破滅になりかねず、元の資料(高橋正雄が調査したもの)ですと「恐れ入りタリ ソシテ困りタリ」と述べるのです。

しかしながら、そのこのところで津川は、そうでなければ根本的な解決にならないということを感じ取ってもあります。そこで津川はどうしたのかはわかりません。ですが「ナカへ 信心ハ出来ルモノデナイ」との表白は、何か底知れない信心の広がりを感じるようになっていきます。それは、信心へのとまどいではなく、信心のすごさ、大切さを前にして、とまどう自分への思いになっているのです。

神と教祖と自分への出会い

神との交感の場面

- 神・教祖・自分に出会う。
- 「どうぞ、信心する者は、常平生、心にみぎを供えて祈れい。いっさいの願い事を成就させてやる」と金光様が教えてくださったが、信心する者は、これを忘れてはならぬぞ。みぎというのは、ありがたき、恐れ多き、もったいなきの三つのきぞ。ご信心する者の心からこの三つのきが抜けたら、おかげは受けられぬぞ。(Ⅲ 尋求135-2)

しょう。ここには「ありがたき、恐れ多き、もったいなき」の「三つのき」が述べられます。それは、言葉によって神や教祖や自分に出会う、その感動、打ち震えという、「理解」における高揚の瞬間を切り取って伝えられた言葉だということがわかります。それは存在への願いに応え、願いを支える信心の理由に直結するものではないでしょうか。信心の理由をそう確認するとき、それは同時に信心する理由の確認にもなっているのではないのでしょうか。

今日は、お聞き頂きありがとうございました。

ここまで見てくると、「言葉が理解になる」というそのとき、何が生じているかがわかかってきます。

そのとき、神とは何か、教祖とは何かを直接に知らされ、と同時に津川や市村のように、自分に出会うということになっているようです。

片岡次郎四郎の『尋求教語録』を最後に見てみま